

教職覚え書き

根本歌子

既に教職歴九年。

新任地に、心身に障害を持つ子供に
対する教育の場を求めた私は、いった
い何を学ぼうとしたのでしょうか。

「チ・エツ」

転校してきた好ちゃんの第一声—

口で言うだけじゃない。

ふてくされて廊下に座り込む。

「孝ちゃん！ 机、どこ？」

得意になって、あつちこつち、的はず
れの案内をしてくれる。

教師が気をもむ机さがしの一コマ。

「なみちゃん！」

呼べど答えず、じつとうつむく。

その強情なこと。

「やーい、自分とこ『ぼく』だつて
さ。ぼくは、『孝ちゃん』というんだ」
と言ひ張る。

説明できずに黙りこくる弘ちゃん。

「先生……さようなら！」

なみちゃんの声。そつと手を出す。

そして、しばらく黙ったままで……そ

のまま教室を出て行った。あの握った
手の柔らかくて暖かいこと。

思つたことをすらすら言葉に出せる
ことは、なんと幸いなことか。

以上は、児童の行為を既成の概念で
見ようとすることに凝り固まっている

私にとつて、子供の身になつて物を見
聞き、考え、行動に移すことの難しさ

を、つくづくと思ひ知らされた当時の
「特殊教育駆け出しの記」の一部であ
る。

彼らは既にこのころから、人間が人
間を見る目は心であるという事実と、

彼らと接する人の心の持ち方によつて
は、同じことでも彼らの事実の捕え方

が微妙に変わってくるものであること
を教えてくれた。

後で分かつたことであるが、転校し
てきた好ちゃんには、彼なりの希望が

あつたし、迎えてくれた教室にささや
かな期待をかけていたのである。「特

殊学級だからだろ」というような、
大人たちの極めて常識的な言葉がどれ

ほど彼の心を傷つけたことか、だれも
気づいちゃいない。このことは、子供

の本来の姿をみつめる目を失つていた
ために犯した大きな過ちである、とし

たら、言いすぎだろうか。

私は子供とのつきあい得学んだ。

人間の本能が、そのとき、そのときの
刺激にまともに応じて赤裸々に働くこ
とを——「かけひき」を知らない真の

子供の姿を。また、この子供たちとの
つきあい得ることはすべて、自分が

子供から学べるものであることを。

「子供とともに学び、育つ」というこ
とは、このようなところにあるのでは
ないだろうか。

以下、このとき以来の心情を記してみ
よう。

《特殊》教育……人生多くを望まず
『堅実で平凡な真理を追求することに
あり』。児童になすべき視点を定める

こともできないままに、この道の困難
や心労に耐えかねて逃げ出したくなる

ような『貧しい心』がいたずらにはや
り、たまらなかつた某年の初春。

だが——だれかがやらねばならない。
彼らとともに歩むことを——どの子供た
ちに対しても可能性を信じ、彼らの目
に見えないものを求めて、ひたすらこ
の道を歩むことを——

特別な使命感に燃えた教師としてで
はなく、子供の本当の幸福を考え、幸
せな将来を考えるべくありふれた人間
として、ようやくここに立ち止まるこ
とができるに至つた。

そしてかつて、「師の道を歩む者な
らば、一度は心身に障害を持つ児の教
育を経験すべし」と、これを説き、こ
の道を開いてくださった恩師からも多
くのことを学んでいたことに気づく。

この道を歩んで八年余。とりわけ一
人、一人の子供の生命をいとおしく尊
く感じるこのごろである。子供を見つ
める目を確かなものに、そして深いも
のにするために、今日も求めて、求め
て追ひ続けている。この教育にたずさ
わる者のみか知り、喜びをかみしめな
がら……

(福島市立福島養護学校教諭)

教育随想

ふれあい

